

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 14 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320026

研究課題名（和文）カーレル・ファン・マンデル著『北方画家列伝』の成立と影響に関する比較芸術論的研究

研究課題名（英文）Comparative studies of the artistic theory on formations and influences of Karel van Mander's Netherlandisch "Lives" in *Schilder-Boeck*

## 研究代表者

尾崎 彰宏 (OZAKI AKIHIRO)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80160844

## 研究成果の概要（和文）：

最大の研究成果は、「カーレル・ファン・マンデル「北方画家列伝」註解」が完成し、出版の準備を整える事ができたことである。この翻訳研究の過程で、以下の点が明らかになった。①マンデルは『絵画の書』において、inventie（着想／創意）、teyckenconst（線描芸術）、wel verwen（彩色）という鍵となる概念を用いて、15、16世紀ネーデルラント絵画史を記述したこと。②マンデルは、自律的に『絵画の書』を執筆したのではなく、とくにヴァザーリの『芸術家列伝』に対抗する形で、ヴェネツィアの絵画論、とりわけロドヴィコ・ドルチェの『アレティーノ』で論じられている色彩論を援用した。つまり、マンデルの teyckenconst は、ヴァザーリの desegno を強く意識しながらも、マンデルは本質と属性の関係を逆転した。ヴェネツィアにおける色彩の優位という考えとディゼーニョを一体化させることで、絵画とは、素描と色彩が不即不離の形で結びついたものであり、絵画として人の目をひきつけるには、属性として軽視された色彩こそが重要なファクターであるという絵画論を打ち立てた。③この絵画とは自律的な存在ではなく、鑑賞者の存在を重視する絵画観である。つまりよき理解者、コレクターが存在することで、絵画の意味はその「あいだ」に生まれるという絵画観が表明されている。このように本研究では、マンデルの歴史観が明らかになり、ネーデルラント美術研究のための新たな地平を開くことができた。

## 研究成果の概要（英文）：

The biggest results of research of "the Karel van Mander's Netherlandisch "Lives" commentary" is completed. In the process of this translation study, our study clarified the following points.(1) Mander described history of Netherlandish paintings in 15, the 16th century, and, in "Schilder-Boeck," he used inventie (idea / originality), teyckenconst (line drawing art), wel verwen (coloring) on this occasion. (2) Mander wrote "Schilder-Boeck" independently, and, particularly, utilized a artistic theory on paintings of Venice, the chromatology which, in particular, was lectured on in "Aretino" of Lodovico Dolce in form to be opposed to "Lives" of Vasari. He reversed the essence and the relations of the essence and attribute, namely, sense of values of Vasari, was reversed, in teyckenconst of Mander, while being strongly conscious of desegno of Vasari. Mander unified color in Venice and desegno of Florence, and drawing and color were tied to one with the painting. The most important element is a color downplayed as an attribute. (3) Paintings do not exist independently. The existence is prescribed by onlookers. In other words, the significances of the paintings are created in "between" paintings and collectors. In this study, historical view of Mander became clear and was able to open the new horizon for the studies of the Netherlandish paintings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2012年度	2,600,000	780,000	3,380,000
年度			
総計	11,300,000	3,390,000	14,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・西洋美術史

キーワード：マンデル、『絵画の書』、『北方画家列伝』、ヴァザーリ、ネーデルラント、美術理論

1. 研究開始当初の背景

本研究で中心的な対象とする『北方画家列伝』は、ネーデルラント絵画に関する最大級に重要な文献である。だが、実はそのこと一つをとっても最近まで十分理解されてきたとは言い難い。そうした研究史の上で実証的な史料研究の集大成ともいえるものが、ヘッセル・ミーデマが編集した『北方画家列伝』（1994～99年）である。全6巻のうち、テキスト（原文と英訳の対訳形式）は1巻のみで、残り5巻は詳細な註解となっている。この註解は事実としてどこまで明らかであるのか、どこからが史料が欠けていて判然としないのかを知る上で、まことに貴重な研究である。しかし、史料性を偏重したこの種の研究の盲点は、積み上げられ、解明された事実からどのような可能性を読みとることができるのか、『北方画家列伝』のテキスト全体から読み取れる美術理論や芸術観を剔抉するには至っていないことだ。マンデル自身が表題頁で謳っているように、本書の狙いは美術家やその作品に関するたんなる事実の集積ではなく、事実を収集しながら、もっと大きな意図を秘めていたのはあるまいか。そうした点を解明しようとするのが、研究に至った背景である。

2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、マンデルの『絵画の書』の第4書である「北方画家列伝」の翻訳を完成させることである。我が国における北方美術研究の基礎資料整備という点からみて、『北方画家列伝』の翻訳の完成そのものが、極めて大きな学術的意義を有するからである。これはヴァザーリの日本語訳が、長くイタリア美術研究を志す者にとって欠かせない糸口だったことを思い起こせば、直ちに了解されるであろう。またそれに加えて、美術家や作品に関する多項目からなる索引を作成することで、ミーデマの註解をも超える利便性を専門家に提供できることになる。

これまで、ファン・マンデル研究において作品記述に用いられている評語と作品の視覚的な質が包括的に比較されることはなかったが、この索引には可能な限り用語も加えることにより、より適切な理解が得られることになる。

3. 研究の方法

研究代表者、尾崎彰宏は、『北方画家列伝』の日本語訳を積極的に進めるかわら、マンデルの芸術論について検討を加えてきた。具体的には、史料翻訳「カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』（1604）」として1995年以来、9回にわたって大学や研究室の研究紀要に掲載してきた。第8回から、本研究プロジェクトの研究者分担者である深谷訓子の協力を得て、翻訳研究を進めている。ファン・エイクからの前半部分については、現在、研究分担者の幸福輝が鋭意進めており、マンデルと15世紀フランドル絵画をどのように位置づけるかという最重要課題の一つに取り組んでいる。マンデルにとってファン・エイクはネーデルラント美術の古典なのか、あるいは後世への発展段階の一里塚であるのか、予見を交えない再検討が求められている。尾崎彰宏は日本語に訳すという基本作業を行いながら、列伝が事実を時系列に配置しているだけではなく、それと矛盾するような事実の配列や、デューラーのハールレム訪問のように、現在の研究水準からすると明らかにありえないような事実をさも事実であったかのように書きこんでいる箇所がしばしば見られることに気づいた。それはたんなる事実誤認ではなく、明らかに意図的におこなわれていたに違いない。ヴァザーリの『美術家列伝』がやはりそうであるように、マンデルの画家列伝も記録集としてではなく、物語として読む必要があることを、そこに張り巡らされたレトリックを解明することが何よりも重要であることに気づかされる。つまり北方の美術家を称賛するための戦略的な

レトリックが企図されていたのではないか。こうした点を中心に解明すべく、分担研究者間の連携を密なものにした。

#### 4. 研究成果

(1) ネーデルラント美術の特質とは何であるか。こうした大きな問題を考えていくには、個別に画家論を積み上げていくことはもちろんだが、往時に書かれた歴史的な価値を持つ美術書を研究の対象とし、俯瞰的な視野を得ることも、その時代の人の目で眺めるという歴史的な視点を獲得するために欠かせない手法である。こうしたアプローチに最適な書物が、ネーデルラントのヴァザーリと称されたカーレル・ファン・マンデルの『絵画の書』

(1604年)である。表題頁に「画家、美術愛好家、詩人の利益と便宜をはかるため、くわえて万国の人びとに向けて書かれた」とあるように、そこに包摂される範囲は狭義の美術理論書の枠組みをはるかに超えている。平成21年度は本研究プロジェクトの初年度にあたり、①この『絵画の書』に含まれる「北方画家列伝」の未邦訳箇所について精力的な翻訳活動を行った。同時に翻訳課程のなかで、マンデルの書物には当初予想していた以上に、用語の使い方が複雑でそのコンテキストを具体的に浮かびあがらせながら、適確に理解していくことに時間を要することが判明した。②こうした翻訳作業と並行して、マンデルの著作がいかにネーデルラント美術の特質を明らかにするのに寄与するのか、具体的な研究もおこなった。研究代表者による「オランダ美術における聖と俗」(『西洋美術研究』)はそのひとつである。③研究代表者ならびに研究分担者および連携研究者は、ネーデルラント、ドイツ、イタリア、スペインにそれぞれ史料調査を行い、マンデルの『絵画の書』が内包する世界を解明すべく、基本資料の収集・調査を手がけた。その結果、これまで知られていたよりもマンデルが芸術の領域において、全ヨーロッパ的な重要性を秘めていたことが了解された。

(2) 本研究では画家や作品を評価する歴史的なパースペクティブの再構築を目指すことを主眼としている。つまり、個別に画家論を積み上げていく前提となる歴史的な現実を認識することを目的としている。このための最大の手段となるのが、往時に書かれた歴史的な価値を持つ美術書を研究の対象としそれを多角的に読解することである。こうしたアプローチに最適な書物が、ネーデルラントのヴァザーリと称されたカーレル・ファン・マンデルの『絵画の書』(1604年)である。平成21、22年度には、その三分の二の日本語への翻訳を完了し、平成23年度に完了できる目処がたつところまで仕事を進めることができた。これにくわえて、マンデルの美術理論とネーデルラントの美術と

の関連性についても研究代表者と分担者がそれぞれの問題関心から研究を進めた。そのなかで研究代表者の尾崎は、ネーデルラント美術の特質として、モノの描写にみられる分野横断的な特徴を解明した。それは、「静物画としての自画像、あるいは自画像としての静物画」という論文においてである。イタリア美術とくらべて、ネーデルラント美術の特徴としてとくに際立っているのは、モノの描写に秀でていることだ。15世紀のファン・エイクはもとより、ヨース・ファン・クレーフェヤン・ホッサルトのような16世紀の画家には、肖像だけでなく「聖母子」のような画題においても図像的には二義的とみなされる事物の描写がすこぶる精密になり、視覚ばかりでなく触覚的に訴えかける働きもっている。このような特徴は、モノが神世界の反映としての記号ではなく、それ自体が自律した存在としてとらえられるようになってきた証左でもある。モノにこだわる世俗化の傾向が、静物画であり自画像であるという二重性のなかに顕在化する事例について解明した。こうしたネーデルラントの肖像画の特徴については、分担研究者の深谷訓子も「ヤン・ファン・スコーレル作《エルサレム巡礼者たちの肖像画》考察」と題する論文において、その独自性を解明している。同じく分担研究者の幸福輝はモノの効果にこだわるネーデルラント美術の特徴について、「「淡い色の紙」 — レンブラントの和紙刷り版画」という論文で、レンブラントの版画を事例として解明している。このように、本年度は、『北方画家列伝』の翻訳ばかりでなく、ネーデルラント美術に関する特徴をマンデルの美術理論とのかかわりを重視しながらあきらかにするという方向でよりいっそう深化できたといえる。

(3) 15世紀から17世紀にいたるアルプス以北の美術を研究するにあたって基本文献となっているにもかかわらず、日本においてはごく僅かの部分訳にとどまっているマンデル著『北方画家列伝』の全訳並びに訳註が完成し、平成25年度の科研費の出版助成を獲得すべく最後の仕上げにあたった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

① Ozaki Akihiro, “Painted Image of Chinese Porcelain-Symbols of Holland as Seen in Still-Life Paintings”, *Art History*, 査読無, 34, 2013, pp.1-12.

② 芳賀京子, 「豊饒の角を持つヘラクレス」、『美術史学』、査読無、34号、2013、pp.61-78.

③ 深谷訓子, 「サミュエル・ファン・ホーホ

ストラテテン」『絵画芸術の動き学び舎への  
手引き』、『尾道大学芸術文化学部紀要』、  
査読無、11号、2012、pp.29-39.  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/10355>

④ Ozaki Akihiro, “The Artistic Challenges of Rembrandt as Painter-Printmaker”, *Rembrandt: The Quest for Chiaroscuro*, 査読無, 1, 2012, pp. 107-118.

⑤ Kofuku Akihira, “Rembrandt's Prints on Asian Paper and their Reception”, *Rembrandt: The Quest for Chiaroscuro*, 査読無, 1, 2012, pp.124-144.

⑥ 尾崎彰宏、深谷訓子、「カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』(13)」、『美術史学』、査読無、33号、2012、pp.125-137.

⑦ 尾崎彰宏、深谷訓子、「カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』(12)」、『美術史学』、査読無、33号、2011、pp.145-190.

⑧ 尾崎彰宏、「オランダ美術における聖と俗——静物画の勃興をめぐる」、査読無、15(2009)、pp.84-99.

[学会発表] (計2件)

① Ozaki Akihiro, “The Eastern Impact. The Enigma of Van Gogh’s challenge to Rembrandt”, International Research Center for Aesthetics and Art Theory (IRCA) (招待講演), University of Rome(Tor Vergata), Roma, 2013年3月19日.

② 尾崎彰宏、「静物画としての自画像／自画像としての静物画」、美術史学会、損保ジャパン東郷青児美術館、2010年10月23日

[図書] (計1件)

① 深谷訓子、『ローマの慈愛』、京都大学学術出版会、2012、404pp.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

尾崎 彰宏 (OZAKI AKIHIRO)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80160844

### (2) 分担研究者

幸福 輝 (KOFUKU AKIRA)  
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・研究員  
研究者番号：00150045  
元木 幸一 (MOTOKI KOUICHI)  
山形大学・人文学部・教授  
研究者番号：10125669  
森 雅彦 (MORI MASAHIKO)  
宮城学院女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：90137612  
芳賀 京子 (HGA KYOKO)  
東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：80421840

深谷 訓子 (HUKAYA MICHIKO)  
尾道市立大学・芸術文化学部・准教授  
研究者番号：30433379

廣川 暁生 (HIROKAWA AKI)  
國學院大学・文学部・講師  
研究者番号：20534887

### (3) 連携研究者

松井 美智子 (MATUI MICHIKO)  
東北学院大学・教養学部・教授  
研究者番号：80165753